



Data

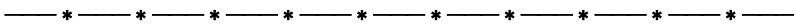
監督：石井裕也
脚本：奥寺佐渡子
出演：妻夫木聡／亀梨和也／勝地涼
／上地雄輔／池松壮亮／高
畑充希／石田えり／佐藤浩
市／宮崎あおい／貫地谷し
ほり／ユースケ・サンタマリ
ア／本上まなみ／田口トモ
ロヲ／徳井優／大鷹明良／
岩松了／大杉漣／鶴見辰吾
／光石研

👁️👁️ みどころ

ブラジル移民の実態や米国の日系移民の悲劇はよく知られているが、カナダ移民は？そして「バンクーバー朝日」って一体ナニ？

大リーグがプロの集団なら、日本のプロ野球はせいぜい高校野球。そんな「常識」はイチローをはじめとする日本人大リーガーの登場によって完全にひっくり返ったが、戦前のカナダでは？

セ・リーグのクライマックス・シリーズ（CS）で起きた阪神タイガースの奇跡以上の奇跡がそこにあったことを、本作でしっかり学びたい。それと同時に、フェアプレイとは？両国の友好とは？その考察もしっかりと！



■□■あちらの「朝日」はダメ！こちらの「朝日」はすごい！■□■

①従軍慰安婦報道、②福島第一原発事故における故・吉田昌郎（まさお）元所長のいわゆる吉田調書報道、そして③池上彰さんの連載コラム対応をめぐって、今や「朝日新聞」はあらゆる方面からの集中砲火を浴びているが、「バンクーバー朝日」って一体ナニ？それは、戦前1914～41年までのカナダ・バンクーバーに実在したアマチュアの日本人野球チームのことだ。

『川の底からこんにちは』（09年）で第53回ブルーリボン賞監督賞を歴代最年少で受賞し（『シネマルーム25』164頁参照）、『船を編む』（13年）で、第37回日本アカデミー賞最優秀作品賞・最優秀監督賞を史上最年少で受賞した（『シネマルーム30』未掲載）石井裕也監督による本作は12月20日から日本で公開されるが、それに先立つ10月10日（日本時間11日）、第33回バンクーバー国際映画祭で観客賞を受賞した。特別

招待作品部門に出品された本作は、世界65の国と地域から集まった350作品以上のなかで最も観客に支持された長編作品というからすごい。

本作は、第38回Montリオール世界映画祭で審査員特別賞グランプリとエキュメニカル審査員賞を受賞した吉永小百合主演の『ふしぎな岬の物語』(14年)のような前向きで希望に満ちたものではなく、むしろ1941年12月7日(日本時間12月8日)の真珠湾奇襲攻撃によって、日本人が「敵性国民」とみなされるところで終わってしまう悲しい物語。しかし、それでもあの時代にこんな日本人の野球チームが存在し、5年目の1919年にはマイナーリーグにあたるインターナショナル・リーグで優勝したというからすごい。その後も1926年に前年から加盟していたターミナル・リーグで優勝を果たした他、1941年に解散させられるまでの間に、1930年と1933年にもリーグ制覇を遂げている。本作が描くのは1931年9月18日の柳条湖事件によって満州事変が始まった頃からの「バンクーバー朝日」の物語だから、クライマックスでの優勝は多分、1930年が1933年のこと・・・。

同じ朝日でも「朝日新聞」はトコトンだめだが、日系カナダ移民の2世を中心に結成された日本人野球チーム「バンクーバー朝日」はすごい。

■ ■ 「朝日」のスマール・ベースボールに注目！ ■ ■

2014年秋の日本のCS(クライマックス・シリーズ)は、セ・パ両リーグともに面白かった。パ・リーグは順当にソフトバンクが勝ったが、セ・リーグの覇者は何と阪神タイガースに。それ以上に面白いのが、アメリカのPS(ポスト・シーズン)で、8連勝というメジャー新記録を成し遂げた、青木宜親選手が所属するア・リーグ(アメリカンリーグ)のカンザ



「バンクーバーの朝日」
2014年12月20日(土) 全国東宝系ロードショー
(C) 2014「バンクーバーの朝日」製作委員会

スシティ・ロイヤルズの快挙だ。大リーグの野球といえば、あっと驚く豪快なホームランや160Km超の剛速球が魅力だが、今年のロイヤルズは、いわゆるスマール・ベースボールが持ち味。つまり、豪快なホームランはなくとも、バント、進塁打、スクイズ、ヒットエンドラン、四死球、盗塁等を駆使して、接戦をモノにしていく野球だ。

そんな目で本作を観ると、体力・腕力で全然及ばない「バンクーバー朝日」の選手たちは、全く野球をやらせてもらっていないことがよく分かる。ピッチャーが繰り出す速球にバットがかすりもせず、外野フライはおろか内野ゴロさえ打てないのだから、これでは東

京六大学野球における東大と同じように、連戦連敗となるのは当然。そこで、新たにキャプテンに指名されたレジー笠原（妻夫木聡）が、やむなく採用したのがスモール・ベースボール。すなわち、バント作戦だ。と言っても、本作に見るそれは、打つのを放棄してすべてバンドに徹するものだから、「本当にこれが野球？」と思ってしまうほど貧弱なもの。しかしそれでも、図体は大きいが俊敏性がイマイチの白人選手の捕球ミスや送球ミスを誘ったり、盗塁を絡めたりすれば何とかなるところが野球の奥深さだ。さらにすばらしいのは、日本では野村克也監督が発案し、完成させたI D野球の一端を、レジーがピッチャーのロイ永西（亀梨和也）に伝授したこと。「この打者は内角が弱い」とみると、一気にそこを攻めたわけだが、それをやってみると、本当にこの打者は予想通りの詰まった内野ゴロに終わったから、なるほど、なるほど……。こんな風に「バンクーバー朝日」が見せるスモール・ベースボールに、最初は選手自身も戸惑っていたが、次第に日本人観客のみならず、白人の観客もこりゃ「面白い、面白い」となり始めたからすごい。

今年の大リーグでロイヤルズはまず、ワイルドカードゲーム（1試合制）でアスレチックスに勝利。続いて、ディビジョン・シリーズ（地区シリーズ）でエンゼルスに3連勝。そして、リーグ・チャンピオンシップ・シリーズ（リーグ優勝決定戦）でオリオールズに4連勝。このように、ロイヤルズはア・リーグのポスト・シーズンで8連勝のうえ、10月22日からのワールド・シリーズでナ・リーグ（ナショナル・リーグ）の覇者たるジャイアンツとの決戦に臨むが、そこでも本作に見る「バンクーバーの朝日」以上の、ロイヤルズ特有のスモール・ベースボールの真髄を見せて欲しい。

■笠原一家から、カナダ移民を考える■

レジーもその親友のケイ北本（勝地涼）も製材所で働いているが、その働きぶりを見ていると、「ソ連の強制収容所並み」とは言わないが、かなりきつい肉体労働であることがわかる。それだけ働いても、給料は白人の半分というからひどいものだ。しかし、それでもレジーの父親・笹原清二（佐藤浩市）はカナダに移住して成功していると思われたいため、働いた金のほとんどを日本に送金しているそうだから、内職の洋裁で何とか家族を養っている妻の和子（石田えり）はいつもブンブン。ハイスクールに通っている妹のエミー笠原（高畑充希）



「バンクーバーの朝日」 2014年12月20日（土） 全国東宝系ロードショー
© 2014 「バンクーバーの朝日」製作委員会

が優秀で、裕福な白人家庭のメイドとして楽しそうに働きながら、奨学金をもらっての大学進学も射程距離だから笠原一家は何とかもっているが、その実態は何かの歯車がちょっとでも狂えばすぐに崩壊してしまいそうだ。

佐藤浩市は今や日本を代表する名優になったから、清二のような「頑固親父」役もよく似合う。出稼ぎで働くのが生きがいというこの男には、息子が野球に精を出す



「バンクーバーの朝日」
2014年12月20日(土) 全国東宝系ロードショー
© 2014「バンクーバーの朝日」製作委員会

理由はホントはよくわからないだろうが、それでもレジーの生き方を尊重しているところはえらい。もっとも、あの時代では「亭主関白」と「男女差別」は仕方ないから、可哀相なのはエミーだ。成績優秀なのに奨学金をもらえなくなったのは明らかな人種差別だが、それにも不満を言わず、前向きに生き、兄の野球応援にも駆けつける姿は健気そのものだ。

1983年生まれ石井裕也監督は、自分も若いだけに若者たちの生き方を描くのが実に巧い。本作ではまず、笠原家におけるレジーとエミーという兄妹の生き方に注目しながら、戦前の日本人のカナダ移民の実態をしっかりと考えたい。

■□■本作の登場人物に見る、カナダ移民の実態は？■□■

日本人のアメリカ移民が、1941年12月8日(日本時間)の「日米開戦」によって大きな苦勞をしたことはいろいろな映画で描かれている。その代表は、山崎豊子の小説『二つの祖国』(83年、新潮社刊)を原作とした、1984年のNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』だ。また、『二つの祖国で 日系陸軍情報部』(12年)では、自身の祖国である米国のために、両親の祖国である日本との戦争に向かう日系2世の若者たちの姿が胸を打った(『シネマルーム30』195頁参照)。本作では冒頭、3年ほど働けば誰でもそれなりの収入と家庭を持つことができる、という安易な勧誘に乗ってレジーの父親たちがカナダへの移住を決意した当時の事情が語られる。そのナレーションをするのは、日系2世のレジーだ。

①日本人街で「三宅豆腐店」を営む三宅忠蔵(岩松了)、②日本人街にある「ニューピアカフェ」を営む松田忠昭(田口トモロヲ)、③「ニューピアカフェ」の常連客で、写真館店主の前原勝男(徳井優)、④「ニューピアカフェ」の常連客で、理髪店店主の河野義一(大鷹明良)、⑤「三宅豆腐店」の向かいでタクシー業を営む堀口虎夫(ユースケ・サンタマリア)たち移民「第1世代」は、それぞれ一生懸命働いて自分の店を持つまでに至ったのだから、立派なもの。こんな風に何とか家業を作り上げてきたのだから、三宅忠蔵の息子で、チーム唯一の所帯持ちのキャッチャー・トム三宅(上地雄輔)の妻・ベティ三宅(貫地谷しほり)が、家業より野球を優先する夫を快く思っていないのは当然だ。

他方、笠原清二とその親友の井上安五郎（光石研）は出稼ぎばかりの人生だから、肉体労働ができるうちはよくても、リタイアする時期になると・・・？また、女性の生き方として面白いのは、日系移民の子供たちの日本語学校教師として立派にやっている笹谷トヨ子（宮崎あおい）と、留学を夢見てやってきたものの、今は娼婦に身を落としている杉山せい（本上まなみ）の2人。2人ともまだ若いが、笹谷トヨ子がかんな裕福な生活ができる（？）のは、よほどバックに恵まれていたとしか考えられない。それに対して、杉山せいは2階のベランダからタダで野球の試合を楽しそうに見学していたが、きっとその生活は悲惨なはずだ。笠原和子やベティ三宅のように主婦として否応なく夫についている女は「家庭」という安らぎの場があるが、笹谷トヨ子や杉山せいのようにあの時代に異国の地で女1匹で生きていくのは至難の業だろう。

本作はあくまで「バンクーバー朝日」に焦点を置いた野球映画（？）だから、以上に紹介した日本人移民の男女はすべて「バンクーバー朝日」の応援団としての存在以上に「分析」されていない。しかし、本作を鑑賞するについては、単に「バンクーバー朝日」が優勝した、バンザイだけではなく、是非彼ら彼女らに見る、カナダ移民の実態を「フカヨミ」してほしいものだ。



「バンクーバーの朝日」 2014年12月20日（土） 全国東宝系ロードショー
© 2014 「バンクーバーの朝日」製作委員会

■□■過酷な試練の中にも、こんなに温かいエピソードが！■□■

石井裕也監督は『川の底からこんにちは』では、ヒロインの木村佐知子を演じる満島ひかりを実にうまく演出して使っていたし、『船を編む』でも登場人物たちのキャラの面白さを強調した演出が大きなポイントだった。しかし、本作では①キャプテンでショートのレジー笠原、②ピッチャーのロイ永西、③セカンドのケイ北本、④キャッチャーのトム三宅、④サードのフランク野島（池松壮亮）を中心メンバーとしてそれぞれのキャラは明快にうち出したものの、あまり凝った演出はせず、予想されるとおりのストーリーを、予想されるとおりに進めていく。最終的で過酷なハードルは、1941年12月8日（日本時間）の真珠湾奇襲攻撃に始まる「日米開戦」によるチームの解散と日本人の強制収容所入りだが、本作は「バンクーバー朝日」が西海岸リーグで優勝するまでにバンクーバーの日本人移民を襲ったたくさんの試練を淡々と描いていく。

個々の日本人が受ける試練はエミー笠原や笠原清二の姿を見れば明らかだし、それは時代背景上やむをえない。しかし、スモール・ベースボール、ID野球、さらに機動力野球を駆使して「バンクーバー朝日」の勝ち星が増えるにつれて酷くなっていく、アンパイヤーのインチキ判定はあまりにもあまりだ。初球に投じられた外角高めのクソボールを「ストライク！」と判定されたのではかなわないうえ、明らかにレジーの頭部目がけてボールを投げられたのではたまったものではない。クライマックス・シリーズの巨人ー阪神第2戦で巨人の沢村投手が阪神の上本の頭部に投げた球は「危険球」とみなされて沢村は退場とされたが、スクリーン上にみるカナダ人のピッチャーは悠々としたものだ。これを見たロイが堪忍袋の緒を切り、つかつかとマウンドに登り、ピッチャーに掴みかかると、逆にピッチャーのパンチを浴びてロイはダウン。その結果が「バンクーバー朝日」は出場停止処分、カナダ人チームは何らおとがめなし、だからこりゃひどい。せつかくチームが上昇しかかったのに、これでは・・・。

チームの面々はもちろん、必死に「バンクーバー朝日」を応援していた日本人街の面々も大いに意気消沈したが、ある日、出場停止処分が解かれたとの嬉しいニュースが。しかし、それは一体なぜ？誰のどんな力によって・・・？それは、やっぱりカナダは民主主義の国だったということだ。インチキ判定を受けた「バンクーバー朝日」のファンが審判に対して「フェアにやれ！」と叫んだのは当然だが、ホントに真剣勝負としての野球を楽しむのなら、カナダ人のファンだって同じように叫ばなければ・・・。そう思っていたところ、現実にそんなシーンがスクリーン上に登場してくると、思わず目に熱いものが。そして、「バンクーバー朝日」の出場停止処分が解かれたのも、カナダ人ファンからのたくさんの抗議の電話が事務局に鳴り響いたためだということがわかると、さらに目に熱いものが・・・。

■ ■ 「朝日」の奇跡は、「虎」の奇跡以上！ ■ ■

セ・リーグのクライマックス・シリーズでは阪神タイガースが敵地・東京ドームに乗り込み、10月18日には何と読売巨人軍を相手に4連勝！こうなれば、優勝チームが持つ1勝のアドバンテージなど問題外だ。なぜ、今年のセ・リーグのCSで阪神はこれほど強かったの？私に言わせれば、それは問題の立て方が逆で、本来は①首位打者マートン、②打点王ゴメス、③セーブ王・呉昇桓をはじめとする個々の優秀な選手（駒）を備えながら、そして最大0、5ゲーム差まで迫りながら、なぜ阪神が1度も巨人の上に行くことができなかったの？そういう問題だ。



「バンクーバーの朝日」
2014年12月20日（土） 全国東宝系ロードショー
© 2014「バンクーバーの朝日」製作委員会

今年のこの劇的な阪神4連勝（の奇跡）については、今後いろいろな専門家がいろいろな角度から分析するはずだが、本作のクライマックスに見る「バンクーバー朝日」の優勝という奇跡は、なぜ実現したの？本作でそれが十分分析されていないのは残念（？）だが、9回2アウト、最後の打者となったロイのボテボテのサードゴロがラッキーにも3塁手の頭上を越えていくシーンを見れば、「朝日」の優勝は決して実力だけではなく、運に大きく左右されたことがわかる。しかし、ここで私が強調したいのは、勝負事は何でも「運も実力のうち」ということ。つまり、運を自分や自軍に呼び込むことができるのは、誰にも負けない信念を持ち、誰にも負けない努力を続けていたことの結果ということだ。日系2世に対して過酷な時代状況下、過酷な労働条件の下で練習する時間もロクに取れないレジーヤロイたちは、どのように日々の努力を続けていたの？スクリーン上で見る限りそれは極めて貧弱なものだから、それを補ったのは知恵。しかし、バント作戦が一時的にいくらまくいっても、当然その対策が取られれば、当初の狙いを封じられるのは当然。そこで、次には更にいかなる知恵を・・・？

阪神タイガースには、次に日本シリーズの闘いが待っている。そこでは、「勢い」だけで4連勝できたCSとは違う新たな知恵がきっと必要になるはずだ。この評論を書いている今、その勝敗の予測はできないが、私は少なくとも本作に見る「バンクーバー朝日」と同じように、阪神タイガースが知恵を尽くしたと言えだけの試合をして欲しいと願っている。